

ニクソン・キッシンジャー外交の研究動向

—対中和解、三角外交の解釈を中心に—

佐橋 亮 *

『ソ連の不安感は、ついに、我が国が有利に利用できるところまできた』

ヘンリー・キッシンジャー⁽¹⁾

『箸でキャビアを食べられる男はヘンリー・キッシンジャーしかいない』

アナトリー・ドブレニン⁽²⁾

I. はじめに

1971年7月15日。リチャード・ニクソン大統領は国民に向けたテレビ演説において、パキスタンを訪問していた腹心ヘンリー・キッシンジャー国家安全保障担当大統領補佐官が極秘のうちに北京を訪問していた事実を明らかにし、翌年にも彼が「平和への旅」と呼ぶ中国訪問を行うことを宣言した。それまで政府内でも秘密裏に準備されていた米中和解という現代の「外交革命」は、劇的に、多くの賞賛と不安を人びとの脳裏に呼び覚ましながら、翌72年2月のニクソン訪中に向けて進展していくことになった。米中両国間には49年の中華人民共和国建国以来、外交関係が存在せず、60年代の米国世論に中国はソ連以上の脅威とも映っていた。それゆえ、対中和解という発想の転換はそれがベトナム和平や対ソ交渉にもたらす効果への期待から当時は極めて高く評価され、秘密外交によって進められた米中交渉史は多くの研究者の関心を集めてきた。

交渉そのものは、かなりの程度まで明らかにされた。当初は資料の不足からキッシンジャー回顧録へ過度に依拠した研究が多かったが、関連する公文書が徐々に明らかになり、米中交渉の会談記録に加え、米政権内部のメモや会話録、国家安全保障研究メモ(NSSM)等が利用可能になった。⁽³⁾ 邦語においても、毛里和子らによって編まれた二冊、『ニクソン訪中機密会談録』と『周恩来キッシンジャー機密会談録』は、キッ

* 東京大学大学院法学政治学研究科博士課程

シンジャー、ヘイグの訪中からニクソン訪中に至るまでの会話録を抄訳した。⁽⁴⁾しかし、交渉過程の解明を通じて何が話し合われたのかという事実関係を確認するだけでは、これほど重要な外交政策を十分に評価したとはいえない。つまり、「現実外交」の実践ともみなされてきたニクソン・キッシンジャー外交が、当事者によって喧伝されたほどの効果をあげたものであったか検証する作業も必要だろう。そのような作業によって、それまでの歴代政権に加えられてきた豊かなアメリカ外交史研究の伝統との格差は漸く解消されることになる。

本稿はそのような問題意識から、三角外交、台湾問題、ホワイトハウスの主導、デタント政策という四つの議論の柱を軸に、対中和解に関してニクソン・キッシンジャー外交に加えられてきた解釈と実証を検討していくこととする。本稿は外交政策が主張されたような効果を上げたか、最新の研究を紹介しながら評価する試論であり、ニクソン政権期における米中両政府間の交渉過程やインドシナ問題に詳細に立ち入ることはせず、研究史を叙述することも意図していない。本稿は、実証研究が本格的に進行しようとしている現在に、実証すべき論点を整理する研究ノートとしての役割を担うものであり、新たな事実関係を提示するものではない。⁽⁵⁾

II. キッシンジャー回顧録における対中和解、三角外交

ニクソン政権期における対中政策の変化、米中和解の最も伝統的な解釈である「現実主義」外交に対しては特徴的な外交が注目を集めたため同時代から研究の蓄積がなされているが、一次史料へのアクセスが制約されていたため、秘密外交プロセスを主導したキッシンジャー自らの回顧録、評伝への依拠が多かった。⁽⁶⁾ N. タッカーも、米中和解と正常化に関する歴史研究の業績は少なく、ジャーナリズムと政治学の成果が多いことを、研究史を総括する文章において指摘している。⁽⁷⁾

回顧録によれば、キッシンジャーは封じ込め政策に込められていたイデオロギー的な発想を嫌った。J.L. ギャディスの表現を引用すれば、「多極化する国際秩序という概念からニクソンとキッシンジャーが導き出したことは、脅威から離れて利益を概念化することであり、利益に基づいて脅威を定義するということ」であり、イデオロギー的な世界観に傾倒することで脅威を増幅させてきた歴代政権の冷戦戦略に疑問を持っていた。⁽⁸⁾ キッシンジャーは、米国とソ連とのパリティが達成されたとの認識もあったため、ソ連と秩序運営の負担を共有するために力の共同管理を行う必要性も理解していた。⁽⁹⁾ そこで、彼は対中和解を通じて、対ソ牽制による東西関係の改善とベトナム

ムにおける名誉ある平和の実現を達成しようと考えたという。

珍宝島事件による中ソ紛争の発生、中国の姿勢転換という状況の変化にも助けられ、中国との和解を通じた「三角外交」を採用することが可能になり、ニクソン訪中への道が開かれる。「相手側が互いに対立しあう可能性がある場合には、両者に対するわが国の選択の幅は、常に相手側同士の間より大きくしておかなければならない」という考えを長年暖めていたキッシンジャーは開陳している。⁽¹⁰⁾ 米中ソ関係において優位なポジションを獲得することが、米ソ交渉やベトナム和平交渉において有利に働くと期待されたのである。72年2月、ニクソン訪中直前の大統領執務室でキッシンジャーは次のようにも語っている。「今後15年間は、ロシアに対抗するために中国に目を向けなければならない。感情を抜きに、力の均衡を組み立てる必要がある。今は、ロシアを正しい方向に導き、しつけるために、中国が必要なのだ。」⁽¹¹⁾

重要なことは、中国との和解は「対ソ関係の面でも有利な地政学的な機会」の獲得のためのみに求められたのではない、ということである。中ソ紛争という事態に直面し、米中和解により国際的な均衡の回復を実現することを米国は目指していた。中ソ紛争がエスカレートし、ソ連が中国に対して大規模な攻撃を仕掛け制圧し、ユーラシアにおける勢力バランスが塗り替えられる事態を防ぐこと、逆に、中ソ関係が修復し一枚岩に戻る可能性も警戒されたため中ソ分断を固定化することが米国にとって必要だった。「もしソ連が、中国に全面的に侵攻するようなことになると、世界の地政学的な均衡だけでなく、心理的均衡までくつがえしてしまう恐れがあり、「我が国の対中接近方針は、ソ連側の自制を促すのに役立つと考えたが、あまり事を急ぎすぎて、ソ連の対中先制攻撃を挑発するようなことは慎重に避けなければならなかった」のである。⁽¹²⁾ しかし、中国と共にソ連に対抗することは考えられていない。「肝心なのは、力の均衡だった。われわれとしては、中国といっしょになってソ連と挑発的に対決しようというのではない（中略）[対中和解の] 利点は、おそらくこれがソ連に対して好ましい衝動を与えるという点である（中略）これ以上中国がやらねばならないことは、なにもない。」⁽¹³⁾ つまり、対中和解の目的は対ソ牽制という反共主義的な動機のみ限定されておらず、米中ソ関係を軸とした大国間関係の安定の実現と中ソ両国への影響力行使だった。

1960年代には相当に強まっていた、政権内外の中国専門家らの対中和解を求める意見を「アメリカ側の一方的な譲歩を迫る人が多かった」と切り捨て、「アメリカが譲歩しなくとも、中国の方から接近してくる可能性がある」ことが重要であったとキッ

シンジャーは回顧する。⁽¹⁴⁾ さらに、彼は、台湾問題や中国の脅威を問題視しなかった点を記している。「米中間の、いわば月並な諸問題、つまり台湾、国連加盟、貿易、旅行、各種の軍縮計画などに関心を払いすぎている嫌いがあった（中略）中ソ関係の緊張がもたらす世界的な影響や、三角関係の下でわが国が手に入れることができるチャンスの実体といった問題にはいっさい触れていなかった。この会議の席で、私は中国のイデオロギーや好戦性をあまりに強調しすぎていることに異議を唱えた。」⁽¹⁵⁾ このような、いわば自画自賛に満ちた記述によって、キッシンジャーはイデオロギー性や政策の連続性からアメリカを解放し、国益の保持を極めて合理的な政策によって追求した外交の達人として描かれる。キッシンジャーによれば、台湾問題は議論が少なく、また譲歩が少なかったという。「第一回会談では、台湾は簡単に触れられただけだった。」⁽¹⁶⁾ 「コミュニケの台湾条項は、一方の他方に対する勝利というものではなかった。（中略）双方は基本的な原則を変えなかった。台湾をめぐる対立が残ったにもかかわらず、アメリカと中国の接近が早まったのは、世界的な力のバランスに対する脅威に、両国が共に重大な懸念を抱いていたからだった。」⁽¹⁷⁾

古典的な評価を一つ、紹介しておこう。政治学者のL. デイトマーは当時の米中ソ関係を「ロマンチック・トライアングル」と呼び、概ね肯定的に評価した。「構造的な不確実性が野心的な性向を強化するのではなく弱めることになった。〔訳注、以下同様：中国とソ連という〕二つの最も対立するプレイヤーは、その不和が大規模戦争に結実しないよう、〔アメリカという〕要によって抑制されたのである。（中略）東アジアの安全保障ジレンマを外交的に解決したアメリカは、ベトナムから撤退し（中略）、〔中ソの二正面に加えて辺境での限定戦争を戦う、通常戦力に関する〕2と1／2戦略から1と1／2戦略へと戦略枠組みを変更することを、極東の勢力均衡を崩すことなく実現できたのである。」⁽¹⁸⁾

以上のようなキッシンジャー回顧録や先行研究の主張に基づけば、ニクソン・キッシンジャー外交による対中和解、三角外交の骨子は次に挙げる四点としてまとめられる。本稿では以下、これら四点に関する論点と最新の研究を紹介し、あわせて最近に開示された公文書に基づいて解明された事実関係についても触れることとする。対中和解が他国に与えた影響、中国との和解により具体的に進んだ米中協力の内実に関する文献は、主にⅦ節で簡潔に紹介する。

1. 三角外交によって対ソ交渉、ベトナム和平交渉は有利に進んだ （Ⅲ節）
2. 対中交渉において、台湾問題に関する議論も譲歩も少なかった （Ⅳ節）

3. 国務省は戦略的思考の欠如ゆえに対中和解プロセスから排除された (V節)
4. 従来の冷戦戦略と決別し国益に基づいた外交により国際的安定を達成した (VI節)

Ⅲ. 「三角外交」と「暗黙の同盟」の有用性

最初に三角外交を検討し、キッシンジャーがデザインしたように、それが機能したのか検討してみよう。R. ロスが編集した『中国、アメリカ、ソ連：三極と冷戦期における政策形成』は、「三角外交」の有用性に対する批判的な評価を含んでいる。⁽¹⁹⁾ 対中接近によりソ連への圧力が増すことを期待したために米ソ首脳会談を米国が先延ばしたと指摘されるように、三角外交の有用性をニクソン政権が信じていたことは観察される。⁽²⁰⁾ 米ソ首脳会談の実現へ向けて米ソ交渉が促進されたことは、ニクソン訪中発表後のドブレイン駐米大使の反応からも明らかだろう。しかし、中国が有した国力の相対的な弱さから、ソ連は米中関係における米国の自制を得るために米ソ交渉において譲歩する必要性を認識していたとはいえ、超大国間のデタントに条件面で影響が及ぼされたとはいえない。⁽²¹⁾ さらに、中ソ両国が辺境において影響力の拡大を競争しあう状況に変化は無く、インドシナ、アフリカに紛争の火種は拡散していくことになる。米中和解によりソ連の中国侵攻に対する抑止が成立したか否かという問いも立てられるが、ソ連側の研究が僅少なため、この点は不明なままである。

それでは、三角外交はベトナム和平交渉の進展にはどれほど寄与したのだろうか。キッシンジャーは米中交渉において、いわゆる「穏当な間隔」を提案した。71年7月における彼の発言は、「我々が求めるのは、軍事的撤退と政治解決の間の移行期です。(中略) 米軍の完全撤退の後、インドシナ人民が政府を変更しても、合衆国は干渉しません」と述べており、信頼性を保持できる「名誉ある平和」を実現した後、ベトナム統一に対して行動を起こさないことを約束している。「穏当な間隔」というキッシンジャーの用語法は72年6月頃に使われ始めるが、70年秋、遅くとも71年春までにニクソン、キッシンジャーはこの発想に行き着いていたという。⁽²²⁾

J. ハンヒマキは「穏当な間隔を売り込む：三角外交とベトナム戦争の終結 1971-73年」において、題名の通り、三角外交を利用したベトナム和平交渉への工作は米国が穏当な間隔という条件を売り込むための工作であったと論じた。しかし、彼も指摘するように、ニクソン訪中の発表後むしろ中ソによる北ベトナムへの支援は増加し、和平交渉でも進展はみられなかった。⁽²³⁾ その後、中ソ両国は米国との二国間関係の中でベトナム問題を阻害要因にすることを避け、72年4月のブレジネフ、グロムイコと

の会談、72年6月周恩来との会談などでキッシンジャーから「穏当な間隔」が提案されると北ベトナムへ働きかけを行った。当時、ニクソン、ブレジネフはともに5月の米ソ首脳会談開催を望み、春季大攻勢に対して米側が爆撃、機雷封鎖を敢行するなかで首脳会談に反対する政治局員が複数存在したにも拘わらずブレジネフは開催を決めたが、首脳会談のキャンセルが米ソ関係を逆戻りさせてしまう懸念も大きく、彼の脳裏に三角外交の影響がどれほどあったのかはよくわからない。⁽²⁴⁾

レ・ドク・トラとの和平交渉の進展に貢献した外的要因を特定化することは難しい。例えば、米軍の空爆も一定の効果をなしており空爆が停止されることは北ベトナム政府にとって和平実現の利点であったし、人民軍の南ベトナムからの撤退を要求しないという72年4月、5月にキッシンジャー、ニクソンの順でソ連に対して提案された別の条件変化も大きい。72年8月において米国、北ベトナム双方が軍事的手詰まりを認識したことを強調する見方もある。⁽²⁵⁾ R. ガーソフが論じたように、和平交渉が進展した理由を分析するにあたり各要素の相対的な影響力を分類することは困難であるが、以上の研究成果から示されているように、米国との関係改善に乗り出した中ソによる北ベトナム政府への働きかけという三角外交の要素のみに和平交渉進展の要因を求めることは難しく、その効果は限定的に理解すべきということである。⁽²⁶⁾

しかし、もし三角外交が対ソ・デタントやベトナム和平に喧伝されたほどには貢献してないとしても、対中和解の価値は別に見出すことができる。つまり、米国は中ソ分断を固定化することで有利な戦略環境が獲得し、国際政治の要の地位を固め、優越を確かなものとすることができた。米中和解によりベトナムでの行動が中国との戦争、衝突に発展する可能性も消滅した。⁽²⁷⁾ さらに、中国との共存を成し遂げることで北東アジア、東南アジアの戦略環境を、それ無しでは不可能なほど劇的に改善することに成功した。換言すれば、中国との「暗黙の同盟」関係の価値それ自体にも、対中和解の正当化の根拠は求めることができる。無論、それが軍事協力や情報提供、同盟国の米国不信の喚起など別の効果に見合っていたかという批判は可能だが、提供された利益が米国に反射的に利用されることは無く、西側の同盟が（国民党政府との同盟ですら）瓦解することがなかったことを考えれば、コストの高いものではなかったと評価することもできる。

戦略的な考慮以外に、市場としての中国の魅力、米中和解による軍事支出の負担軽減、さらに、対中和解によりピースメーカーとして米国が自らを喧伝できることも重要だった。⁽²⁸⁾ 米国内の世論、議会は対中和解を高く評価していた。既に60年代から

退潮著しかったジャッド元下院議員ら率いる「百万人委員会」は、中ソ紛争が米国にとって好機を意味せず、対中貿易緩和等も望ましくないこと、中国が共産主義国家である事実が変わらないことなどを活動の中で訴えていたが、ニューヨーク・タイムズ紙に「かつて強力だったチャイナロビー」と既に過去の存在として扱われるほどその勢いは衰えていた。議員もメディアも対中政策の転換へ舵を切り直しており、それは民主党のリベラルだけでなくサーモンド、ゴールドウォーターなど保守派の議員からも歓迎された。少なくともニクソン訪中までの対中和解は政治的な得点となった。⁽²⁹⁾

Ⅳ．対中和解と台湾問題 — 「譲歩」をどのように捉えるか？

対中和解はそれだけで価値がある。そして、R. ロスのように、中国がソ連に対する恐怖を高めたことで米国は中国から譲歩を引き出す形で対中和解を実現することができたという立場を取れば、対ソ牽制論とは異なり、ソ連の脅威を米中関係改善に利用したという観点から三角外交を評価することができるだろう。⁽³⁰⁾ 中国側が対ソ脅威認識を修正したために米中和解が実現したことはおおよそ間違いがない。

とはいえ、台湾問題における譲歩はどちらがなしたのか、この点こそ、米中交渉史をめぐる最大の関心事の一つと言っても過言ではなく、容易に結論が出る問題ではない。キッシンジャーは回顧録において極力言及を避けているが、台湾問題は中国側が話し合いを強く望んだ、会談の焦点だった。無論、中国が台湾問題のみに議論を限定せず、台湾問題の解決をすぐに求めないと判断したからこそ、キッシンジャーが対中和解を前進させようとしたことは間違いない。⁽³¹⁾ さらに、関係省庁の合議で作成されたNSSM106も、台湾分離を恐れる中国には台湾が中国の一部であることを承認するだけで米中関係を改善できるという見方を取っていた。キッシンジャーの第一回訪中直前、ニクソンは台湾問題での拙速な譲歩を許さず、台湾の売り渡しとの印象を避けるよう指示を出しており、南ベトナムにおける手詰まり、日本における軍国主義の復活と大国化、国境に対するソ連の脅威という三つの恐怖を議題にするように指示している。⁽³²⁾

ニクソン訪中により米中双方が合意した72年2月の上海コミュニケでは、最終的に米国の立場として以下の内容が盛り込まれている。つまり、米国は「台湾海峡の兩岸のすべての中国人が、中国はただ一つであり、台湾は中国の一部分であると主張していることを認識し、「異論をとえなない」。「中国人自らによる台湾問題の平和的解決についての米国政府の関心を再確認する。」「台湾から全ての米国軍隊と軍事施設を

撤退ないし撤去するという最終目標を確認する。」「地域の緊張が緩和するにしたがい、台湾の米国軍隊と軍事施設を漸進的に減少させるであろう。」⁽³³⁾ 米中交渉とコミュニケにおいてニクソン政権の中国政府への条件提示と歩み寄りはどのように評価すればいいのだろうか。ここでは、積極的な評価と否定的な評価の立場をそれぞれ順に紹介したい。

ロスは戦略的に弱い立場に置かれていた中国が譲歩したと論ずる。コミュニケにおいて米国は自らの立場を主張するにあたり、台湾への防衛コミットメントを否定せず、台湾からの米軍の撤退には期限を設けず地域の緊張緩和という条件を盛り込み、「平和的解決」についての「関心」を示すことができた。⁽³⁴⁾ このようにコミュニケによる得点を強調する立場が存在する。台湾への駐留米軍削減は台湾防衛に必要な能力をあまり損なわないため実現可能な妥協のシンボルだった。また、「この地域の緊張が緩和するに従い」と条件を付与することが、インドシナや台湾海峡を始めとした東アジア地域の安定に中国を貢献させることにつながることも期待された。他方で、米華相互防衛条約、それに基づく台湾防衛へのコミットメントは、米国の信頼性に拘わる重要な問題であり、この時点で譲ることは困難だった。キッシンジャーはニクソンに、「平和が保たれる限り… [米華条約は] 運用されない…歴史がこの問題を解決することにゆだねよう」と問題が先送りできることを確認し、同盟の解消は提案していない。「兩岸のすべての中国人」が一つの中国の立場を主張することに「異論をとえない」とのコミュニケにおける文言も、米華条約が失効しないとの法的解釈を前提にしていた。⁽³⁵⁾

しかし、米国が譲っている側面、つまりコストを払っていることも事実であり、「コミュニケの字句を反芻しながら、台湾問題では中国側の譲歩がほとんどないことに気づいた」という見方もおそらく間違っていない。⁽³⁶⁾ R. ブッシュも、「中国は台湾の法的地位に関する基本的原則も問題の解決策も変更しなかった。毛沢東と周恩来は [台湾] 問題が [米中] 二国間関係が改善される前に解決されるべきであるとの事前の主張を緩和しただけだった」と述べた上で、コミュニケが四点一台湾が中国の一部であること、台湾問題が中国人の内政問題であること、台湾問題の解決と距離を置いたこと、駐台米軍の削減を北京政府が平和的解決を保証すること無しに約束したこと—において中国に有利な条件を提示したと、批判的な視点を提示している。「[キッシンジャーが言うように] 米国が台湾問題の基本原則を維持したと主張することは幾分か不誠実な態度だろう」とブッシュは酷評している。⁽³⁷⁾

加えて、コミュニケの文面とニクソン、キッシンジャーが口頭で中国指導部に伝えたことの間にあるギャップに注目することもできる。⁽³⁸⁾ キッシンジャーは周恩来に率直に語っている。「コミュニケが何と言おうと、我々の政策は総理が信頼できるものだということです。ですから総理は、我々が独立した台湾を支持しないという事実を信頼できるはずです（中略）[コミュニケは] 我々の政策にはそれほど関係があるわけではありませんが、一般の印象に関係します。」⁽³⁹⁾ 交渉では口頭において、国府の大陸反攻、台湾独立、日本の台湾への干渉と軍国主義の復活を支持しないことを米側は保障した。同盟国の行動を拘束することを公然とコミュニケに記載することは米国の信頼性を失墜させるため不可能であり、センセーショナルな訪中の最中においても密室での口頭了解を与えることが政治的な限界だった。国府の拘束を中国側に言質として与えることを交渉材料にしようとする米国の戦術は、その後も正常化交渉の中で続いていくことになる。台湾の法的地位に関して地位未決定論を公式に繰り返さないことも米側は約束している。（中国側は台湾問題の早期解決までは望んでおらず、国家承認をニクソン訪中の前提とはせず、国交正常化の最終段階の課題と位置づけていた。）さらに、71年7月の段階で、台湾問題はいずれ解決するであろうと将来における中台統一を容認しているとも解釈されている発言までキッシンジャーは周恩来に与えている。⁽⁴⁰⁾

台湾からの米軍撤退に関するコミュニケの「最終目標」は、より具体的に、ニクソンから周恩来に語られている。「台湾に関しては（中略）米軍の恒久的な駐留がアメリカの安全のために必要だとは信じません。私の目標は（中略）残留部隊の撤退、三分の二だけでなく、残りの三分の一を含むすべての撤退です。私がいかにこれを行うかということは、私が世論をいかに扱うかということに等しいのです。ベトナムへのアメリカの関与が終わり次第、三分の二は撤退するでしょう。私の計画は、残りの三分の一も削減し、私の政権担当中に撤退させることです。（中略）帰国したときに、誰かが、台湾から全軍を撤退させると首相と密約しなかったかと質問したら、私は、しなかったと答えます。しかしそれは私の計画にあると首相には申し上げました。」⁽⁴¹⁾

台湾問題のみに焦点を当てれば、米中交渉では米国が自らの主張を中国側に近づけていったにすぎない。三角外交という戦略的優位獲得のために、台湾問題は中国側と交渉するための「糊代」としての意味合いが強かった。中国を唯一の合法政府と認める段階に達せずとも、「中華民国がすべての中国人を支配しているとの虚構を、アメリカが遂に放棄」したことだけでも、その象徴的な意味は極めて大きく、国府の国際

的地位は壊滅的に悪化することとなった。「[戦略的曖昧性は保持されたものの] 米国が台湾の将来的な地位に関して北京政府の認識を受け入れたことにより、[台湾海峡における] 危機の可能性は相当に低下した」と対中和解の台湾問題への効果に関して肯定的な評価もされるが、ニクソン政権には対中和解後における台湾問題の解決へ向けた具体的なヴィジョンは存在していなかった。⁽⁴²⁾

ニクソン訪中の発表により対中和解プロセスの開始が明らかにされたことで、国際社会が北京政府へと傾斜することは避けようのない事態となり、71年10月、キッシンジャーの第二回訪中と時を同じくしてニューヨークで開催された国連総会において、アルバニア決議は採択され、米国歴代政権が長年努力を重ねてきた国連工作は国府脱退という結末を迎えた。ホワイトハウスの秘密外交により行動空間の少ない国務省だったが、そのためもあって代表権問題には多くの努力を費やした。⁽⁴³⁾ なお、ニクソン、キッシンジャーは中国代表権問題に注意を払っていなかったという解釈が強かったが、1971年春の段階で二重代表制と逆重要事項指定案の発想をキッシンジャーが認めていたことは実証されている。⁽⁴⁴⁾ しかし、国府の国連からの追放を防ぐことの重要性を認識していたキッシンジャーも、対中和解へ邁進する中で大きな行動を取る余裕はなかったようだ。

V. 国務省はなぜ対中和解から排除されたのか？

1971年に東アジア専門家として国家安全保障会議事務局に入ったR. ソロモンは、「[スタッフになった当時] 中国政策はワンマンショーだった。全てがホワイトハウスで運営されていた」と率直に回顧する。当時国務省中国課長のA. ジェンキンスは上海コミュニケの草稿作成や訪中への同行で対中和解に幾ばくかの関与をみせたが、ロジャース国務長官やM. グリーン東アジア担当国務次官補は上海コミュニケの交渉がほぼ終結した後に草稿を確認できただけであった。「国務省の上海コミュニケへの関与はほぼゼロだ。もちろん、そのことは褒められたことではないが」と、キッシンジャーの側近であったW. ロードは語っている。⁽⁴⁵⁾

なぜ国務省は対中和解プロセスから外されたのか。キッシンジャー回顧録が主張するように、国務省とホワイトハウスにおいて対中和解の方法論が根本的に異なったため、ホワイトハウスが主導したのか。⁽⁴⁶⁾ このような素朴な疑問に対して、E. ゴー『米国の対中和解を構築する』とR. アクシネリ「暫定協定を求めて：台湾問題と米中和解 1969—1971年」は機密解除された公文書の分析により手がかりを与えている。⁽⁴⁷⁾

まず、ゴーによると、国務省とホワイトハウスでは珍宝島事件や対中和解の可能性に対する認識において、決定的な違いが存在していたという。ゴーの表現を借りれば、ホワイトハウスが「脅かされた大国」として中国を捉える一方で、依然として中国を本質的に変化できない革命国家としてみていた国務省の対応は慎重にすぎた。例えば、70年2月、中国が閣僚又は大統領特使クラスを受け入れる準備があると提案した際には国務省は警戒し、ワルシャワの大使級会談で条件をつめることを提案している。他方、ホワイトハウスは、中国が実質的に変化したとまでは判断していなかったが、米国代表団を中国に招くことは中国指導部にとって多くの問題を引き起こしかねない行動であり、さらに戦略的には米国との連携が求められている状況をあわせて鑑みれば、台湾問題に関して譲歩をする誘因が高いとみていた。米国のカンボジア爆撃の実施により米中大使級会談は開催されず、以後、米中間の交渉がパキスタンやルーマニア経由の秘密ルートで行われていくなかで国務省の関与は低下していった。ニクソン政権期の国務省のような立場がジョンソン政権期に支配的であったことを考慮すれば、69年における中ソ対立の悪化がジョンソン政権期に生じていたとしても、それに沈黙を保った可能性が高いともゴーは推論する。⁽⁴⁸⁾

しかし、対中和解という発想を外交に適用する契機として珍宝島事件による決定的な中ソ分断という特殊な状況変化の重要性は大きく、時間の経過と共に国務省も対中和解の可能性に前向きに姿勢を変化させていた。アクシネリが論ずるように、70年1月、2月のワルシャワ会談に関わる政策決定において、国務省の慎重な姿勢をニクソンとキッシンジャーが承認していた。⁽⁴⁹⁾ 国務省の中国専門家である後の中国大使のS.ロイは、次のように述べ、対中和解の主導権を握ろうとしたホワイトハウスに、国務省が排除された要因を見出している。「国務省の中国担当の官僚は国家安全保障会議でキッシンジャーのスタッフを務めていた国務省スタッフと同様に変化に対応できる人びとだった。ホワイトハウスからのコントロールは国務省内の官僚的抵抗を乗り越える必要性を反映したものだったとは言えない。むしろ、中心から政策過程をコントロールしようとする努力を反映したものだったといえる。」⁽⁵⁰⁾ また、キッシンジャーの「バックチャンネル」が国務省を政策プロセスから除外したことは、対ソ交渉でも同様に観察される。これらの諸点は、ゴーの推論に必ずしも賛同できないものとして挙げられよう。

ニクソンとキッシンジャーのどちらが主体的な役割を果たしたのか、という問題提起も長年なされてきた。⁽⁵¹⁾ ニクソンのリーダーシップを再評価する見方もあるが、ニ

クソンが外交における偉業を自らの功績とするためにキッシンジャーを目立たせなくするように汲々と努力したことや、三角外交への理解が薄く、対ソ牽制や北ベトナムへの強硬姿勢などが目立つ点でキッシンジャーとは明らかに発想が異なることは指摘すべきだろう。また、政治家として長年のキャリアを持つニクソンは、議会におけるチャイナロビーへの説明をキッシンジャーに求め、民主党の対中政策への関与を排除するなど国内政治の視点を持ち合わせていた。⁽⁵²⁾ 他方、対中政策の転換そのものはキッシンジャーに限られた発想ではなく、彼が政権発足当初は対中和解の実現に消極的評価を与えていたことには留意すべきだが、激化する中ソ対立を秩序形成にまで高めて利用する発想がキッシンジャーと彼を支えるホワイトハウスにこそ強く存在していたことは既に指摘したとおりである。⁽⁵³⁾ なお、秘密外交と国務省の排除については、キッシンジャーが主導したところが大きいのが、秘密外交により国内的な支持の調達が難しかったという手法面での批判があることも記しておこう。

VI. ニクソン、キッシンジャーと冷戦の呪縛

ニクソン・キッシンジャー外交はそれまでの冷戦期におけるアメリカ外交と異なりイデオロギー的な発想から外交を解放したといわれる。しかし、ニクソン、キッシンジャーはそれまでの歴代政権にみられるような冷戦思考と決別できていたのだろうか。⁽⁵⁴⁾

M. スモールはニクソンが米国の信頼性を保持するためにベトナムにおける「名誉ある平和」に固執したことが平和交渉を遅らせ、無駄な兵士の死をもたらしたことを批判している。⁽⁵⁵⁾ 同様の発想はキッシンジャーにもみられる。彼は、封じ込め政策の中で求められてきたアメリカの信頼性の保持という視点を軽視せず、安易な撤退やベトナム化に反対し信頼性を保持するために名誉ある撤退を探っていた点を語っている。⁽⁵⁶⁾ フォーリン・アフェアーズ誌上に掲載した論文では、次のようにも述べる。「信用とか威信とかを馬鹿にするのがいかに流行とはいえ、こうした言葉は無意味ではない。他の国々はわが国の一貫性を信頼すればこそ、わが国と提携できるのである。」⁽⁵⁷⁾ ベトナム化を批判しカンボジア爆撃を主張したように、キッシンジャーは米国の弱さをみせることが信頼性の低下につながると考えたからこそ、力による解決で交渉の糸口を探った。

デタントは「ソ連の敵対的な行動又は冒険主義の抑制と同盟国の力と結束の維持」を図る意味で封じ込めと大差のないものであり、ソ連を抑制する方法が歴代政権と

異なるにせよ、同盟国の結束を維持するために信頼性保持を追求する点では同じだった。⁽⁵⁸⁾ 当時、欧州においてソ連が「選択的デタント」を試み、西独がブランド政権の誕生により東方外交を活性化させようとする中で、デタントにおける主導権を回復し西欧のフィンランド化を防ぐことが米国にとって重要と考えられていた。⁽⁵⁹⁾ キッシンジャーは、「NATO を結束させる最前の方策は、デタントの原則を受け入れること（中略）NATO のいくつかの国を選んでデタントをはかる、といったやり方をソ連に許し、NATO 分断の期待を抱かせることがあってはならない」と回顧し、さらにブランドへの不信感も隠すところがない。⁽⁶⁰⁾ 英仏独の指導者は当時既にベトナム情勢にさして関心を払っていなかったが、対中和解を通じて米ソ交渉を進める糸口を得ることは必要だった。

ブランド政権への敵意は次第に解消していくが、ここで指摘したいことは、ニクソン・キッシンジャー外交においても、同盟国に対する信頼性の保持と主導権への固執のために、「国益」と結びつかない強硬策や介入から自由ではなかったという点である。信頼性が失われていると認識するとき、それを回復するためにコミットメントは強化される。サイゴン陥落などにより米国の信頼性が揺らぐなかで、共産主義とソ連に対抗し辺境の親米政権を維持するために、キッシンジャーはチリに対して秘密行動による介入を行い、アンゴラへの警戒を高めた。⁽⁶¹⁾ ソ連がエチオピアへの関与を深めると米国がソマリアとの関係を深めるといった具合に、対立の要因は辺境に芽生えていくことになる。⁽⁶²⁾ 二極システムが変化していない以上同盟国の必要性は変わらず、政策決定者も利益が世界大に拡大しているとの認識から解き放たれていなかったため、すなわち「利益に基づいて脅威を定義する」なかで利益の所在がそれまでと大差なかったために、世界大のコミットメントは継続した。確かに、ニクソン・フォード政権期には米国はイデオロギー的な外交政策の修辭を最小化し、インドシナへの泥沼の介入から手を引いたが、結果として採用された政策には歴代政権との継続性が見いだせるのである。

R. リトワックも『デタントとニクソン・ドクトリン』において、辺境においてソ連を封じ込めるために行動した例を見れば、ニクソン・ドクトリンも歴代政権からの連続性の中で捉えられ、信頼性保持の要請は依然としてあるために中心と辺境を分けることができず、選択的関与は不可能だったと批判している。⁽⁶³⁾ ベトナム撤退後の米国は、コミットメントに十分な能力を持たないため新たな地域紛争への介入は難しく、それ故に大国間デタントによりコミットメントの履行が求められる状況を生じさせな

いことをねらった。しかし、この期待は裏切られる結果となる。⁽⁶⁴⁾ 二極から多極へと国際情勢の認識を改めようとしたデタント政策が、結局はソ連の膨脹主義の復活により崩壊していくことは皮肉な結果だった。⁽⁶⁵⁾

キッシンジャーの「現実主義」外交の評価を試みた藤原帰一もこの点を批判している。彼は、「キッシンジャー外交の骨子は、アメリカが緊張緩和政策の先手をとることで、軍事的優位に依存しなくても政治的優位を確保する、という点にあった（中略）アメリカから中国に接近して米中国交を正常化し、中ソの接近する機会は可能な限り断ち切る、つまり緊張緩和を進めながら、その先手は絶えずアメリカが握るという権力算術が「デタント」と「米中和解」の実体であった」と大國間の権力政治を巧みに操った点には一定の評価を与えた。しかし他方で、キッシンジャーも現地の傀儡政権への支援は中断できなかったこと、大國間戦争と切り離しても局地戦争に勝てなかったことを限界としてあげ、地域への対応では「失敗の繰り返し」だったと藤原は結論している。⁽⁶⁶⁾ J. ハンヒマキも『間違った構築』において同様に、三角外交という大國間でのゲームが地域レベルの問題の解決に貢献しなかったと結論した。⁽⁶⁷⁾ さらに、S. ホフマンは『優越か国際秩序か：冷戦期におけるアメリカ外交』において、三角外交により資源が転用できるなど一定の評価を与えながらも、それが軍拡など世界や地域における課題の解決に貢献していないことにも限界を求め、デタントによる優越の確保が望ましい国際秩序につながっていないと批判している。⁽⁶⁸⁾ 平和の実現と結び付けられてきたデタント政策の看板倒れに、外交政策の手法として批判的な評価が与えられているといったところだろう。

デタント政策の評価においては、その失敗の根拠を何に求めるかについても争われてきた。一方ではウォーターゲート事件やサイゴン陥落による国内政治の混乱、議会の復権により政権が描いていたデタント政策の追求が困難になったと主張されてきた。内政による制約を強調すれば外交政策としてのデタント政策の有用性は傷つかない。しかし他方で、ここまでに取り上げてきた研究成果の多くが、デタント政策そのものが内在していた限界を米中ソの同床異夢や冷戦思考の残滓にも求めているのである。⁽⁶⁹⁾

Ⅶ. 結びに代えて 一研究の広がりと残されている研究課題

対中和解が他国に与えた影響、中国との和解により具体的に進んだ米中協力の内実に関する研究は広がりを見せている。例えば、英国と米中関係の転換に関しては、長

年中国と独自の関係を有してきた英国も対中和解に利用されることはなかったことなどが指摘される。⁽⁷⁰⁾ 米中和解が中越関係に残した禍根についても議論がある。⁽⁷¹⁾ また、米中和解により実現した東南アジアの安定によって米国の負担は軽減されたが、アセアンを結成した東南アジア諸国に対して米国は二国間関係の強化を企図するなど新たな段階に移っていった。⁽⁷²⁾

佐藤政権に直前まで通知されることがなかった対中和解は、いわゆる「ニクソン・ショック」を日本外交に加えることになり、研究者の関心も高い。⁽⁷³⁾ しかし、ニクソン政権が包括的な対日戦略を改訂することが出来なかった事実は、ニクソン・キッシンジャー外交が中ソに対する三角外交の実現という大國間政治に関心を集中させていたことを物語っている。⁽⁷⁴⁾ また、最近ではニクソン・ショックへの還元論を修正し、例えば日越国交正常化をショック前からの連続性の中で捉えるべきと論じるような研究が登場していることも指摘しておこう。⁽⁷⁵⁾

国際的地位と安全保障の前提が完全に崩れてしまった台湾は、米中間の秘密協定の存在を疑いながらも、米中和解という大局的变化の中で台湾の存在感を増すための努力として、多数国との貿易関係を強化する努力を行い、米国内にも領事館や経済関係団体の事務所を増やし輸出入額を飛躍的に向上させた。国内でも社会の安定を図るためにメディア規制の強化や政治改革に乗りだし、さらに「国家十大建設」や本省人の政府高官への登用を進め台湾化による基盤作りを始める。米国議会における親台湾派との関係も維持され、75年7月には米中関係の改善のために台湾に住む人々の自由と安全が脅かされないことを求めた法案が下院を通過し、上院でも同趣旨の署名に29名が応じた。米華条約の変更の際には上院と協議することを求めたドール・ストーン修正法案が78年7月下院で通過し、10月には上院でも超党派の25名の議員が議会の承認なく安全保障条約の実質に影響を与えることを禁ずる内容の法案を提出した。反共主義者は中国との関係改善に前向きであったが、国交正常化以前から台湾関係法につながるような議会における台湾支持の流れは胎動し始めていた。⁽⁷⁶⁾

資料的な広がりから徐々に研究は深まりを見せているが、大きく二つの方向に課題が残されている。一方で、資料的な裏付けをもとに、伝統的解釈とそれに対する批判を問い直すことが求められている。政策としての評価を加えるために、対中政策に託された期待と現実で得られた結果、さらに意図せずして生じた副作用が何であったのか、問わねばならない。三角外交の効果と台湾問題については本文で触れたが、米中和解後に「暗黙の同盟」の文脈でなされた米中軍事協力、情報提供、さらには中ソ対

立が辺境への介入をどれほど増加させ、結果的に地域紛争とデタント崩壊の原因をもたらしたのか解明されるべきだろう。⁽⁷⁷⁾ 対中政策の転換に関しては、道義的な正しさを問うような告発的な文献に加え、中国への「深入り」が批判されることが多い。例えば、J. マンによる『米中奔流』は、キッシンジャー「路線」とでも表現される和解後の対中政策が人権状況や国内統治などに起因する中国国内の不安定性を軽視した点を問題視する。⁽⁷⁸⁾ なお、「深入り」とは相反するようにも聞こえるが、H. ハーディングの『脆い関係』は、米中関係が脆弱な基盤の上に成り立っていることに警鐘を發した。米中両国は同床異夢の上に関係を取り結んだに過ぎず、中国に対する警戒心が完全に払拭されたわけではなかったのである。⁽⁷⁹⁾

他方で、ニクソン訪中以後の展開にもつながる研究課題として、台湾問題に関して、ニクソン、キッシンジャーはどこまで譲る準備ができていたのか、そのような解決策の条件が国内政治の悪化でどこまで変化をしたのかという点も探求すべきだろう。その点を明らかにすることで、台湾との公式関係の維持などにおける従来の立場からかけ離れた正常化という、カーター・ブレジンスキー外交がニクソン・キッシンジャー外交からの「継続」であるのか、それとも「跳躍」をしたのか、解明することにつながっていく。⁽⁸⁰⁾

国際政治史上に燦然と輝いている現代の「外交革命」であり、しかし謎のベールに包み隠された米中和解の交渉過程を、回顧録や断片的に利用可能な公文書から解明することが研究の第1世代だった。それ故、増加する一次史料を利用した、より緻密で正確な交渉史を描くことも必要だろう。しかし、交渉の細部を明らかにするだけでなく、国家行動の背景に潜む意図や認識を解明すること、意図された効果をニクソン・キッシンジャー外交が達成できたのか検証することも重要である。関心の高さに裏打ちされて研究は増加し、新たな研究の地平は徐々にその姿をみせているように思える。

注

- (1) キッシンジャー『キッシンジャー秘録 1』、235 頁。
- (2) アイザックソン『キッシンジャー下』、7 頁。
- (3) 国立公文書館 (National Archives II, College Park, MD)、ニクソン大統領関連史料 (Nixon Presidential Materials) に保管されている文書の案内として、差し当たり以下。(最終アクセス日: 06 年 5 月 1 日。) <http://nixon.archives.gov/find/textual/presidential/nsc/index.html> ニクソン・フォード政権に関する公式の外交文書集も出版が始まっているが、同シリーズの中国編は本年秋に刊行予定である。*Foreign Relations of the United States 1969-1976: Foundations of Foreign Policy, 1969-1972* (hereafter FRUS), Washington DC: Government Printing Office, 2003. 国家安全保障公文書館 (National Security Archives) が公表している米中関係史関連文書集、及びマイクロフィッシュは以下。Burr, "New Documentary." Burr, "Nixon's Trip." Burr, et. al., "Negotiating U.S.-Chinese Rapprochement." Burr, "Henry Kissinger's Secret Trip to China." *China and the United States: From Hostility to Engagement, 1960-1998* (Washington DC: National Security Archives). また、2006 年に以下の会談録が整備され、利用可能になった。*The Kissinger Transcripts: A Verbatim Record of U.S. Diplomacy, 1969-1977*. (Washington DC: National Security Archives). 珍宝島事件前後に関しては冷戦史国際関係プロジェクト (CWHP) から以下が発表されている。Chen and Wilson, "All under the Heaven Is Great Chaos."
- (4) 毛里訳『ニクソン訪中機密会談録』。毛里・増田監訳『周恩来・キッシンジャー機密会談録』。
- (5) 米中関係の先行研究の整理 (Historiography) としては、差し当たり以下を参照。Tucker, "Continuing Controversies." Goh and Foot, "From Containment to Containment?"
- (6) キッシンジャー『キッシンジャー秘録』。Kissinger, *Years of Upheaval*. 以下もニクソン・フォード政権期を別の角度からキッシンジャー自らが検討しているが、特に目新しい事実関係はない。キッシンジャー『外交下』、361-439 頁。主な評伝は以下。多くはキッシンジャー外交を積極的に評価する。Gaddis, "Rescuing Choice from Circumstance". Isaacson, *Kissinger*. Kuklick, *Blind Oracles*, pp.182-203. Schulzinger, *Henry Kissinger*. スミス、247-278 頁。また、政権スタッフのインタビュー記録として以下が重要。Daalder and Destler, *The Nixon Administration National Security Council*. Daalder and Destler, *China Policy and National Security Council*. Tucker, *China Confidential*. 回顧録としては以下。Green and et. al., *War and Peace with China*. Holdridge, *Crossing the Divide*.
- (7) Tucker, "Continuing Controversies."
- (8) Gaddis, *Strategies of Containment*, p.283.
- (9) Kuklick, *Blind Oracles*, pp.193-194. 「軍事的に二極、政治的に多極」というキッシンジャーの力の認識については以下を参照。Henry A. Kissinger, "Central Issues of American Foreign Policy," *FRUS, 1969-1976, I*, doc. 4. (originally appeared in *American Foreign Policy; Three essays by Henry Kissinger*, New York: W.W. Norton, 1969, pp.51-97.)
- (10) キッシンジャー『キッシンジャー秘録 1』、219 頁。なお、キッシンジャーは 69 年 5 月のホワイトハウス内の会議でも同様の趣旨の発言を、対中和解が対ソ交渉を阻害するとして国務省のソ連

専門家の発想を否定する文脈で、述べている。FRUS, 1969-1976, I, doc. 24.

- (11) FRUS, 1969-1976, I, doc. 105.
- (12) キッシンジャー『キッシンジャー秘録 1』、231-235 頁。なお、キッシンジャー外交の特徴としては、複数のアジェンダを切り分けることなく議論の俎上にのせることで交渉の進展を図ろうとする「リンケージ戦略」、國務省ルートを利用せず A. ドブルイニン駐米ソ連大使を利用した「バックチャンネル」による米ソ交渉が挙げられることが多い。
- (13) キッシンジャー『キッシンジャー秘録 3』、213-215 頁。
- (14) キッシンジャー『キッシンジャー秘録 1』、219 頁。
- (15) 前掲書、234 頁。
- (16) キッシンジャー『キッシンジャー秘録 3』、196 頁。
- (17) キッシンジャー『キッシンジャー秘録 4』、206 頁。
- (18) Dittmer, *Sino-Soviet Normalization*, p.202. なお、中国に対する脅威認識がどのようなものであったかは詳細に検討する必要がある、この戦略変更だけで対中脅威感が消えたとは言いきれない。キッシンジャーが認めるように、現実はその準備はできていない「2 と 1 / 2」戦略を掲げることは、むしろ状況の不確実性を生み、抑止を機能させず、運用面でも混乱を生むことが懸念された。キッシンジャー、『キッシンジャー秘録 1』、289-292 頁。Garrett and Glaser, “From Nixon to Reagan”.
- (19) Legvold, “Sino-Soviet Relations,” pp.65-92. Sestanovich, “U.S. Policy toward the Soviet Union,” pp.125-147. Ross, “Conclusion,” pp.179-195.
- (20) Hanhimäki, *Flawed Architect*, pp.124-126.
- (21) Ross, “Conclusion,” p.190. ニクソン訪ソの発表により米ソ交渉の進展がみられたというキッシンジャーの主張は以下。また、よく指摘されているように、ソ連側が 72 年に予定されていた首脳会谈の実施時期をニクソン訪中より先行させたい希望を伝えたことは事実である。キッシンジャー『キッシンジャー秘録 3』、308-316 頁。Kissinger Transcripts, doc. 314. FRUS, 1969-1976, I, doc. 94. ニクソンも三角外交の成果を政府高官に対する演説で語っている。Ibid., doc. 119.

なお、1970 年 6 月に、偶発的戦争 (accidental-war) の文脈で中国からの挑発的な行動 (provocative act) に対する共同行動がソ連から提起されたことをもって、キッシンジャーは「ソ連は首脳会谈に応じる代償として、実は、反中国同盟の結成を要求しようとしているのだ」と回顧し、中ソ対立の要因を強調している。(キッシンジャーの発想においては、均衡を実現するためには中ソどちらか一方と他方に対する対抗を行うことは、少なくとも当初は、想定していない。) 他方でガーソフは、中国脅威にソ連が苛まれていたというキッシンジャーの見方は性急であり、挑発的な行動の議論が SALT 交渉を遅延させなかったことから判断すればソ連が交渉を進める意志は強かったとしている。総じて、米国の対中接近が SALT 交渉に大きな影響を与えたことを論じたものは管見の限り見当たらない。(ソ連側の政策決定に関して、さらなる研究成果が待たれるところであって、対中和解への影響がなかったとは言いきれない。また、キッシンジャーはベルリン交渉と SALT 交渉のリンケージの効果を主張している。) なお、SALT 交渉の最終段階である首脳

- 会談時に SALT 交渉団をほぼ介さずに、詰めの作業と条件面での最終的な妥協をキッシンジャーと側近が行ったことは批判にさらされている。キッシンジャー『キッシンジャー秘録 2』、306 頁。Garthoff, *Détente and Confrontation*, pp.199-205, 270-274. Garthoff, *A Journey*, Ch.13. Bundy, *A Tangled Web*, pp.322-327.
- (22) 毛里、増田訳、前掲書、61 頁。Hanhimäki, “Selling the ‘Decent Interval’”, p.165. Hanhimäki, *Flawed Architect*, pp.42-46. Kimball, *The Vietnam War Files*, pp.27-28.
- (23) Hanhimäki, “Selling the ‘Decent Interval!’”
- (24) Gaiduk, *The Soviet Union and the Vietnam War*, pp.223-245. Dobrynin, *In Confidence*, pp.246-249.
- (25) Kimball, *The Vietnam War Files*, p.31.
- (26) Garthoff, *Détente and Confrontation*, pp.288-294.
- (27) Garver, “Sino-Vietnamese Conflict and the Sino-American Rapprochement.”
- (28) 「ピースメーカー」としての喧伝については、差し当たり、Goh, *Constructing the US Rapprochement with China*, ch.9. なお、1971 年 6 月に対中経済制裁の解除がニクソンより宣言された。
- (29) “‘China Lobby,’ Once Powerful Factor in U.S. Politics Appears Victim of Lack...,” *New York Times*, April 26, 1970. Kusnitz, *Public Opinion and Foreign Policy*, pp.131-152. Bachrack, *The Committee of One Million*, pp.258-275. Sutter, *China Quandary*, pp.17-46. 但し、72 年以後に訪申した議員らの多くは、台湾問題での妥協をしてまで米中国交正常化は必要なく、台湾問題の解決に有利な条件が生じることを待つべきと考えていたという。Sutter, *China Quandary*, pp.24-25.
- (30) Ross, *Negotiating Cooperation*. なお、ロスのこの著作は米側文書開示前のものであり、会談録を利用できているわけではない。
- (31) 差し当たり、以下。Accinelli, “In Pursuit of a Modus Vivendi,” p.25. Tucker, *China Confidential*, p.235.
- (32) Romberg, pp. 22-29. Report, 71/02/16, “NSSM-106: United States China Policy,” *China and the United States*, doc. 202.
- (33) 外交青書 16 号、525-528 頁。
- (34) Ross, *Negotiating Cooperation*, pp.45-50. 毛里・増田訳、前掲書、353-355 頁。Holdridge, *Crossing the Divide*, p.92.
- (35) Garthoff, *Détente and Confrontation*, pp.267-268. Holdridge, *Crossing the Divide*, p.94. Goh, pp.197-198. なお、国務省は段階的な削減という形で交渉材料として活用することを構想し、台湾問題の平和的手段による解決の約束との取引まで求めるよう提言した。他方キッシンジャーは、台湾問題の解決に関する交渉を在米米軍の削減問題や米中国交正常化とリンクさせない姿勢を取った。
- (36) リリー『チャイナハンズ』、166 頁。
- (37) Bush, *At Cross Purposes*, p.136.
- (38) Accinelli, “In Pursuit of a Modus Vivendi,” p.12. Bush, *At Cross Purposes*, pp.125-136.
- (39) 毛里・増田訳、前掲書、244-245 頁。
- (40) 毛里訳、前掲書、39 頁。Romberg, p.33. 無論、これ以後には「平和的解決」をめぐる米中両国で

の立場の違いが鮮明になる。

- (41) 前掲書、150-151 頁。なお、71 年 7 月のキッシンジャー訪中前にニクソンは、将来にわたって米軍の台湾駐留が必要でないことは議論しないよう指示しており、72 年の自らの訪中時には立場を前進させていたことになる。Memorandum, 71/07/01, “Meeting between President, Dr. Kissinger and General Haig, Thursday, July 1st, Oval Office,” in Burr, “Henry Kissinger’s Secret Trip to China.” (also in *Kissinger Transcripts*, doc. 298.)
- (42) Tucker, “Strategic Ambiguity or Strategic Clarity?,” pp.192-193.
- (43) Madsen, *Chinese Chess*, pp.63-85. Bush, *At Cross Purposes*, pp.114-117.
- (44) Accinelli, “In Pursuit of a Modus Vivendi,” pp.31-38.
- (45) Daalder and Destler, *The Nixon Administration National Security Council*, pp.26-28.
- (46) なお、ケネディ・ジョンソン政権期の対中・台政策に関しては、先行研究の整理を含めて以下を参照。拙稿「ジョンソン政権と台湾海峡兩岸」。
- (47) Goh, *Constructing the US Rapprochement with China*. Accinelli, “In Pursuit of Modus Vivendi”. ゴーの著作に関する書評としては、拙稿「学界展望」。
- (48) Goh, *Constructing the US Rapprochement with China*, chs.5-6.
- (49) Accinelli, “In Pursuit of a Modus Vivendi,” pp.13-18. なお、パトリック・テイラーは珍宝島事件の最中、ソ連の中国核施設攻撃を容認する代わりにベトナムへの軍事支援削減を引き出す案がニクソンからレアード国防長官に語られたこと、中国への戦略核攻撃に関する研究が指示されたことを述べているが、後者は NSSM69 で確認できるものの、前者はレアード国防長官とのインタビューにのみ基づいており信憑性が疑わしい。Tyler, *A Great Wall*, pp.62-63.
- (50) Daalder and Destler, *China Policy and National Security Council*, p.8. なお、米中和解が米国、中国のどちらから先導された動きと捉えるかについては争いがある。Garthoff, *Détente and Confrontation*, pp.276-278. Goh and Foot, “From Containment to Containment?,” p.264.
- (51) *Ibid.*, pp.264-265.
- (52) 差し当たり、Schaller, “Détente and the Strategic Triangle.” また、ニクソンと国務省の関係悪化の原因を副大統領在任中のアイゼンハワー政権期以来のものとして捉える指摘もある。差し当たり、Holdridge, *Crossing the Divide*, p.33.
- (53) Haldeman, *The Haldeman Diaries*. アイザックソン「キッシンジャー上」、437 - 438 頁。藤原「米中冷戦の終わりと東南アジア」、47 頁。
- (54) ニクソン政権期のデタントに関する文献としては以下を参照。Garthoff, *Détente and Confrontation*. Gaddis, *Strategies of Containment*. Hanhimäki, *Flawed Architect*. Nelson, “Détente over Thirty Years”. スチーブソン『デタントの成立と変容』。デタントはジョンソン政権期にも相当に進展した。Costigliola, “Lyndon B. Johnson, Germany, and ‘the End of the Cold War.’”
- (55) Small, *Presidency of Richard Nixon*.
- (56) キッシンジャー『キッシンジャー秘録 I』、300-301 頁。Litwak, *Détente and Nixon Doctrine*,

- pp.85-87. 冷戦期アメリカ外交における「信頼性」の一般的な説明として、McMahon, “Credibility and World Power.” Gaddis, *Strategies of Containment*.
- (57) Kissinger, “The Viet Nam Negotiations.” ここでは訳文をアイザックソン『キッシンジャー上』、252頁から引用した。
- (58) *FRUS, 1969-1976*, I, p.137. Schwartz, “Alliance, Empire, or Something In-Between,” p.5. デタントによるソ連の抑制に関しても、厳しい評価がある。例えば W. バンディは、1972年5月に首脳会談で合意された「基本原則」においてソ連との「平和共存 (peaceful coexistence)」が盛り込まれたことは、ソ連が圧力や脅迫、秘密行動を自制することを約束するものではなく、米国に対する力の行使を行わないことを意味しているに過ぎないと喝破している。Bundy, *A Tangled Web*, p.323.
- (59) 差し当たり、Johnson, *Improbable Dangers*, pp.61-68.
- (60) キッシンジャー『キッシンジャー秘録2』、120頁。Schwartz, “Alliance, Empire, or Something In-Between,” pp.2-9.
- (61) ロバート・ジャービスはこれを「ドミノ理論のパラドックス」と呼んだ。このように失地回復の行動が行われるという見方はプロスペクト理論に通じる。なお、ジャービスはサイゴン陥落後のカンボジア、グラナダへの介入を例として挙げる。Jervis, *System Effects*, p.267. アンゴラについては、差し当たり以下。Garthoff, ch.15. キッシンジャー外交への批判として、これらの介入の持つ不道徳性が指摘されるが、それはデタント政策の有用性の評価とは分けて考えるべきであることは指摘しておきたい。
- (62) Schraeder, *United States Foreign Policy toward Africa*.
- (63) Litwak, *Détente and Nixon Doctrine*, p.146. なお、ニクソン・ドクトリンに対しては、その介入条件の曖昧性や、同盟国が十分に対処能力を有していなかった場合のコミットメントが不明確な点をリトワックは批判する。
- (64) *Ibid.*, pp.124-126. 「現実主義」外交が結果として国内的な支持を取り付けることができず、議会や世論の干渉を招いてしまったこと、それを象徴するように、1976年の大統領選挙で前職のフォード候補ですらもデタントという用語を選挙キャンペーンで利用しないことを徹底していたことなどは、デタント政策の政治的な失敗とも言えるだろう。*Ibid.*, p.87.
- (65) *Ibid.*, pp.2-3.
- (66) 藤原「アジア冷戦の国際政治構造」、347-351頁。
- (67) Hanhimäki, *Flawed Architect*, pp.488-489.
- (68) Hoffmann, *Primacy or World Order*, pp. 246-247. メアリー・カルドーや橋口豊がデタントとその崩壊プロセスを米ソ協調論の枠組みで捉える視点を提示しているが、これはホフマンの議論にも近いところがある。Kaldor, *Imaginary War*. 橋口「米ソ・デタントと新冷戦」。
- (69) R. ガーソフが指摘するように、米ソの地域関与に加え、米国がソ連の軍拡に対する恐怖を増していったこともデタントの崩壊を決定づける重要な要素である。Garthoff, *A Journey*, ch.17.
- (70) Kaufman, *Confronting the Communism*. Hamilton, “A ‘Week that Changed the World’”.

- (71) Garver, “Sino-Vietnamese Conflict and the Sino-American Rapprochement.”
- (72) Litwak, *Détente and Nixon Doctrine*, p.103. 小笠原「アメリカの東南アジア政策」、188-197頁。李「東アジアにおける冷戦と地域主義」、220-226頁。対中和解がアジアに与えた影響については、以下も詳しい。Yahuda, *The International Politics of the Asia-Pacific*, pp.74-85.
- (73) 差し当たり、以下を参照。緒方「戦後日中・米中関係」。添谷「1970年代の米中関係と日本外交」。若月『全方位外交の時代』。池田『日米関係と「二つの中国」』。
- なお、M. シャラーは、71年7月の訪日の際に、レアード国防長官が日本の核武装論を中国に対する牽制として勸奨したこと、ニクソンも日本に対する防衛義務を妨げるのであれば日本の核武装も辞さないと中国に伝えたと言ったことを記述している。Schaller, “Détente and the Strategic Triangle,” pp.377-378. しかし、レアードに対してニクソンの承認が与えられていたのかは定かではなく、キッシンジャーはレアードの独断的な発言であるとしている。毛里・増田訳、前掲書、67頁。
- (74) 潘「ニクソン政権の対日安全保障政策」。当時の米中関係において「日本」という要素は、日本の軍国主義の復活や台湾への干渉の懸念、そして日米安保体制による「瓶の蓋」、台湾問題の処理における「日本方式」の文脈に限定され議論されていた。米中それぞれの政府による米中関係への対処に日本政府の行動が与えた影響も（日本方式を提示してしまったという極めて消極的な事例を除けば）少ない。つまり、当時の日本外交の変動は米中ソ関係によって説明されるが、逆に、日本を説明変数にした米中（ソ）関係における事例はほとんどない。添谷が論じるように、日本に大國間政治である米中ソ関係に一極として加わろうとする意図もなかった。それ故、例えば日米中関係と形容されるようなダイナミズムを見出すことは難しいと思われる。添谷、前掲論文。
- (75) 昇「日本のインドシナ戦後復興政策と日米関係」。
- (76) 松田「米中接近と台湾」。Chang, “Taiwan’s Policy toward the United States,” pp.233-250. Madsen, *Chinese Chess*, pp.223-249. Tucker, *Taiwan, Hong Kong, and the United States*, pp.125-140. なお、ヘンリー・ジャクソンやジーン・カークパトリックなどの思潮にみられるように、理想主義者とも分類される人物でも、反共の目標を優先させるあまり国内体制に盲目となり、権威主義体制への支援を正当化した。本稿の文脈では、70年代後半におけるジャクソンと鄧小平の面会や最恵国待遇供与の議論を参照されたい。Kaufman, *Henry M. Jackson*.
- (77) Ali, *US-China Cold War Collaborations*. Goh, *Constructing the U.S. Rapprochement with China*, Ch.10.
- (78) Mann, *About Face*.
- (79) Harding, *A Fragile Relationship*.
- (80) 中国政策に関してカーター政権をそれまでと区別する見方については、アレクシス・ジョンソン大使やリリー大使の回顧に示唆を受けている。宇佐美「米中国交正常化の研究」、498-509頁。リリー、前掲書、205-209頁。但し、フォード大統領訪中などにみられるように、米国が徐々に台湾問題に関する立場を修正していることも見落とせない。この点は今後の筆者の研究課題ともするが、ここでは米中間における台湾問題の条件面・対応面での変化を探った文献として以下を参照されたい。Romberg, *Rein In at the Brink of the Precipice*.

参考文献

- Accinelli, Robert. "In Pursuit of a Modus Vivendi: The Taiwan Issue and Sino-American Rapprochement, 1969-1972." In William C. Kirby, Robert S. Ross, and Gong Li (eds.). *Normalization of U.S.-China Relations: An International History*. Cambridge: Harvard University Press, 2005.
- Ali, S. Mahmud. *US-China Cold War Collaborations, 1971-1989*. London: Routledge, 2005.
- Ambrose, Stephen E. *Nixon: Volume II, 1962-1972*. New York: Simon and Schuster, 1989.
- Bachrack, Stanley D. *The Committee of One Million: "China Lobby" Politics, 1953-1971*. New York; Columbia University Press, 1976.
- Bundy, William. *A Tangled Web: the making of foreign policy in the Nixon presidency*. New York: Hill and Wang, 1998.
- Burr, William. *The Kissinger Transcripts: the Top Secret Talks with Beijing and Moscow*. New York: New Press, 1999. (ウィリアム・バー (鈴木主税・浅岡政子訳) 『キッシンジャー [最高機密] 会話録』毎日新聞社、1999年。)
- _____. "New Documentary Reveals Secret U.S., Chinese Diplomacy Behind Nixon's Trip." *National Security Archive Electronic Briefing Book*, No. 145. December 21, 2004.
- _____. "Nixon's Trip to China Records now Completely Declassified, Including Kissinger Intelligence Briefing and Assurances on Taiwan." post on the website (<http://www.gwu.edu/~nsarchiv/NSAEBB/NSAEBB106/index.htm>). December 11, 2003.
- _____, Sharon Chamberlain, Gao Bei, and Zhao Han. "Negotiating U.S.-Chinese Rapprochement: New American and Chinese Documentation Leading Up to Nixon's 1972 Trip." *National Security Archive Electronic Briefing Book*, No. 70, May 22, 2002.
- _____. "Henry Kissinger's Secret Trip to China: The Beijing-Washington Back-Channel, September 1970-July 1971." *National Security Archive Electronic Briefing Book*, No. 66. February 27, 2002.
- Bush, Richard. *At Cross Purposes: U.S.-Taiwan Relations Since 1942*. New York: M.E. Sharpe, 2005.
- Chang, Jaw-Ling Joanne. "Taiwan's Policy Toward the United States, 1969-1978." In Kirby, William C., Robert S. Ross, and Gong Li (eds.). *Normalization of U.S.-China Relations: An International History*. Cambridge: Harvard University Asia Center, 2005.
- Chen, Jian and David Wilson. "All under the Heaven Is Great Chaos: Beijing, the Sino-Soviet Border Clash, and the Turn toward Sino-American Rapprochement, 1968-1969." *Cold War International History Bulletin* 11 (Winter 1998/99): 155-175.
- Cohen, Warren I. *America in the Age of Soviet Power, 1945-1991*. Cambridge: Cambridge University Press, 1993.

- _____. *America's Response to China*. fourth edition. New York: Columbia University Press, 2000.
- Costigliola, Frank. "Lyndon B. Johnson, Germany, and 'the End of the Cold War.'" In Warren I. Cohen and Nancy Bernkopf Tucker (eds.). *Lyndon Johnson confronts the world: American foreign policy, 1963-1968*. New York: Cambridge University Press, 1994.
- Daalder, Ivo H. and I.M. Destler (eds.). *The National Security Council Project: Oral History Roundtables: China Policy and the National Security Council*. College Park: Center for International and Security Studies at Maryland, 2001.
- _____. *The National Security Council Project: Oral History Roundtables: the Nixon Administration National Security Council*. College Park: Center for International and Security Studies at Maryland, 2001.
- Dittmer, Lowell. *Sino-Soviet Normalization and Its International Implications, 1945-1990*. Seattle: University of Washington Press, 1992.
- Dobrynin, Anatoly. *In Confidence: Moscow's Ambassador to America's Six Cold War Presidents*. Seattle: University Washington Press, 1995.
- Gaddis, John Lewis. *Strategies of Containment, revised edition*. New York: Oxford University Press, 2005.
- _____. "Rescuing Choice from Circumstance: the Statecraft of Henry Kissinger." In Gordon A. Craig and Francis L. Loewenheim (eds.). *The Diplomats: 1939-1979*. Princeton: Princeton University Press, 1994.
- Gaiduk, Ilya V. *The Soviet Union and the Vietnam War*. Chicago: Ivan R. Dee, 1996.
- Garrett, Banning N. and Bonnie S. Glaser. "From Nixon to Reagan: China's Changing Role in American Strategy." In Kenneth Oye, Robert Lieber, and Donald Rothchild (eds.). *Eagle Resurgent?: The Reagan Era in American Foreign Policy*. Boston: Little Brown, 1983.
- Garthoff, Raymond L. *A Journey through the Cold War: A Memoir of Containment and Coexistence*. Washington DC: Brookings Institution Press, 2001.
- _____. *Détente and Confrontation: American-Soviet Relations from Nixon to Regan, revised edition*. Washington DC: Brookings Institution Press, 1994.
- Garver, John W. "Sino-Vietnamese Conflict and the Sino-American Rapprochement," *Political Science Quarterly* 96, no.3 (1981): 445-464.
- Goh, Evelyn. *Constructing the U.S. Rapprochement with China, 1961-1974*. New York: Cambridge University Press, 2005.
- _____. "Nixon, Kissinger, and the "Soviet Card" in the U.S. Opening to China, 1971-1974." *Diplomatic History* 29, no. 3 (2005): 475-501.
- _____ and Rosemary Foot. "From Containment to Containment?: Understanding US Relations

- with China since 1949.” In Robert D. Schulzinger (ed.). *A Companion to American Foreign Relations*. Malden: Blackwell, 2003.
- Green, Marshall, John H. Holdridge, and William N. Stokes. *War and Peace with China: First-hand Experiences in the Foreign Service of the United States*. Bethesda: Dacor Press, 1994.
- Haldeman, H.R. *The Haldeman Diaries: inside the Nixon White House*. New York: Putnam, 1994.
- Hanhimäki, Jussi. *Flawed Architect: Henry Kissinger and American Foreign Policy*. New York: Oxford University Press, 2004.
- _____. “Selling the ‘Decent Interval’: Kissinger, Triangular Diplomacy, and the End of the Vietnam War, 1971-1973.” *Diplomacy & Statecraft* 14, no.1 (2003): 159-194.
- Hamilton, K.A. “A ‘Week that Changed the World’: Britain and Nixon’s China Visit of 21-28 February 1972.” *Diplomacy & Statecraft* 15, no. 1 (2004): 117-135.
- Harding, Harry. *A Fragile Relationship: The United States and China since 1972*. Washington DC: Brookings Press, 1992.
- Hoffmann, Stanley. *Primacy or World Order: American Foreign Policy since the Cold War*. New York: McGraw-Hill, 1978.
- Holdridge, John H. *Crossing the Divide: An Insider’s Account of the Normalization of U.S.-China Relations*. Lanham: Rowman and Littlefield, 1997.
- Isaacson, Walter. *Kissinger: A Biography*. New York: Simon and Schuster, 1992. (ウォルター・アイザックソン『キッシンジャー』日本放送出版協会、1994年。)
- Jervis, Robert. *System Effects: complexity in political and social life*. New York: Columbia University Press, 1997.
- Johnson, Robert. *Improbable dangers: U.S. conceptions of threat in the Cold War and after*. New York: St Martin’s, 1994.
- Kaldor, Mary. *Imaginary War: Understanding the East-West Conflict*. Oxford: Basil Blackwell, 1990.
- Kaufman, Robert Gordon. *Henry M. Jackson: A Life In Politics*. Seattle: University of Washington Press, 2000.
- Kaufman, Victor S. *Confronting Communism: U.S. and British Policies toward China*. Columbia: University of Missouri Press, 2001.
- Kimball, Jeffrey. *The Vietnam War Files: Uncovering the Secret History of Nixon-era Strategy*. Lawrence: University Press of Kansas, 2004.
- Kissinger, Henry. *Diplomacy*. New York: Simon and Schuster, 1994. (ヘンリー・キッシンジャー (岡崎久彦監訳)『外交』日本経済新聞社、1996年。)
- _____. *Years of Upheaval*. Boston: Little Brown, 1982.
- _____. *White House Years*. Boston: Little Brown, 1979. (ヘンリー・キッシンジャー『キッシンジャー秘録』小学館、1979年。)

- _____. “The Viet Nam Negotiations.” *Foreign Affairs* 47, no.2: 211-234.
- Kuklick, Bruce. *Blind Oracles: Intellectuals and War from Kennan to Kissinger*. Princeton: Princeton University Press, 2006.
- Kusnitz, Leonard A. *Public Opinion and Foreign Policy: America's China Policy, 1949-1979*. Westport: Greenwood, 1984.
- Legvold, Robert. “Sino-Soviet Relations: the U.S. Factor.” In Robert S. Ross (ed.). *China, the United States, and the Soviet Union: tripolarity and policy making in the Cold War*. New York: M.E. Sharpe, 1993.
- Lilley, James with Jefferey Lilley. *China Hands: Nine Decades of Adventure, Espionage, and Diplomacy in Asia*. New York: Public Affairs, 2004. (ジエームズ・R・リリー (西倉一喜訳) 『チャイナハンズ 元駐中米国大使の回想 1916-1991』草思社、2006年)。
- Litwak, Robert. *Détente and the Nixon Doctrine: American Foreign Policy and the Pursuit of Stability, 1969-76*. New York: Cambridge University Press, 1984.
- Madsen, Robert A. *Chinese Chess: US China Policy and Taiwan, 1969-1979*. Ph.D dissertation to Trinity College, University of Oxford, 1999.
- Mann, James. *About Face*. New York: Alfred Knopf, 1999. (ジエームズ・マン (鈴木主税訳) 『米申奔流』共同通信社、1999年。)
- McMahon, Robert. “Credibility and World Power: Exploring the Psychological Dimension I Postwar American Diplomacy.” *Diplomatic History* 15, no. 4 (1991): 455-471.
- Nelson, Keith L. “Détente over Thirty Years.” In Robert D. Schulzinger (ed.). *A Companion to American Foreign Relations*. Malden: Blackwell, 2003.
- Nixon, Richard M. “Asia After Vietnam.” *Foreign Affairs* 46, no.1 (October 1967). (リチャード・M・ニクソン 「ベトナム後のアジア」 『フォーリン・アフェアーズ傑作選 1922-1999 上』朝日新聞社、2001年、281-301頁。)
- Romberg, Alan D. *Rein In at the Brink of the Precipice: American Policy toward Taiwan and U.S.-PRC Relations*. Washington DC: Henry L. Stimson Center, 2003.
- Ross, Robert S. *Negotiating Cooperation: the United States and China 1969-1989*. Stanford: Stanford University Press, 1995.
- _____. “Conclusions: Tripolarity and Policy Making.” In Ross (ed.). *China, the United States, and the Soviet Union: tripolarity and policy making in the Cold War*. New York: M.E. Sharpe, 1993.
- Schaller, Michael. “Détente and the Strategic Triangle Or, “Drinking your Mao Tai and Having Your Vodka, Too.” In Robert Ross and Jiang Changbin. *Re-examining the Cold War: U.S.-China Diplomacy, 1954-1973*. Cambridge: Harvard University Asia Center, 2001.
- Schraeder, Peter J. *United States Foreign Policy toward Africa: Incrementalism, Crisis, and Change*.

New York: Cambridge University Press, 1994.

Schulzinger, Robert D. *Henry Kissinger: doctor of diplomacy*. New York: Columbia University Press, 1989.

Schwartz, Thomas A. "Alliance, Empire, or Something In-Between: Henry Kissinger and the American Role in Europe." Paper presented on the Conference of the Historical Society, June 3, 2006, Boston, MA. (Cited here with the author's permission.)

Sestanovich, Stephen. "U.S. Policy Toward the Soviet Union, 1970-90: the Impact of China." In Robert S. Ross (ed.), *China, the United States, and the Soviet Union: tripolarity and policy making in the Cold War*. New York: M.E. Sharpe, 1993.

Small, Melvin. *The Presidency of Richard Nixon*. Lawrence: University Press of Kansas, 1999.

Solomon, Richard H.. *Chinese Political Negotiating Behavior, 1967-1984*. Santa Monica: RAND, 1995.

Sutter, Robert. *China Quandary: Domestic Determinants of U.S. China policy, 1972-1982*. Boulder: Westview Press, 1983.

Tucker, Nancy Bernkopf. "Strategic Ambiguity or Strategic Clarity?" In Tucker (ed.), *Dangerous Strait: the U.S.-Taiwan-China Crisis*. New York: Columbia University Press, 2005.

_____. *China Confidential: American Diplomats and Sino-American Relations, 1945-1996*. New York: Columbia University Press, 2001.

_____. "Continuing Controversies in the Literature of U.S.-China Relations Since 1945." In Warren I. Cohen (ed.). *Pacific Passage: the Study of American-East Asian Relations on the Eve of the Twenty-First Century*. New York: Columbia University Press, 1996.

_____. *Taiwan, Hong Kong, and the United States, 1945-1992: Uncertain Friendships*. New York: Twayne Publishers, 1994.

Tyler, Patrick. *A Great Wall: Six Presidents and China: An Investigative History*. New York: Public Affairs, 1999.

Yahuda, Michael. *The International Politics of the Asia-Pacific, second and revised edition*. London: Routledge Curzon, 2004.

池田直隆『日米関係と「二つの中国」 池田・佐藤・田中内閣期』木鐸社、2004年。

石井明・朱建榮・添谷芳秀・林曉光編『記録と考証 日中国交正常化・日中平和友好条約締結交渉』岩波書店、2003年。

宇佐美滋『米中国交正常化の研究』国際書院、1996年。

小笠原高雪「アメリカの東南アジア政策」五味俊樹・滝田賢治編『現代アメリカ外交の転換過程』南窓社、1999年、181-206頁。

緒方貞子『戦後日中・米中関係』東京大学出版会、1992年。

佐橋亮「ジョンソン政権と台湾海峡兩岸 —— 信頼性と自己抑制 ——」『日本台湾学会報』第8巻(2006年)、42-66頁。

_____「学界展望＜国際政治＞ Evelyn Goh, *Constructing the U.S. Rapprochement with China, 1961-1974: From “Red Menace” to “Tacit Ally.”*」『国家学会雑誌』第119巻7・8号(2006年)、135-138頁。

R.W. スチープンソン(滝田賢治訳)『デタントの成立と変容』中央大学出版会、1989年。

マイケル・スミス(押村高、太田義器他訳)『現実主義の国際政治思想』垣内出版、1997年。

添谷芳秀「1970年代の米中関係と日本外交」『日本政治学会年報』、1997年、3-20頁。

滝田賢治『太平洋国家アメリカへの道 その歴史的形成過程』有信堂高文社、1996年。

昇亜美子「日本のインドシナ戦後復興政策と日米関係 1968年-1973年」『法学政治学論究』61巻6号(2004年)、163-194頁。

橋口豊「米ソ・デタントと新冷戦(2・完) ヨーロッパにおける東西対立の本質」『法学論集』(名古屋大学)、163号、89-130頁。

_____「米ソ・デタントと新冷戦(1) ヨーロッパにおける東西対立の本質」『法学論集』(名古屋大学)、162号、37-69頁。

藩亮「ニクソン政権の対日安全保障政策 —— 十字路口にたつ同盟と米国の選択」増田弘編『ニクソン訪中と冷戦構造の変容』慶應義塾大学出版会、2006年、89-114頁。

藤原婦一「米中冷戦の終わりと東南アジア」『社会科学研究』(東京大学)、1993年、35-47頁。

_____「アジア冷戦の国際政治構造 —— 中心・前哨・周辺 ——」東京大学社会科学研究所編『現代日本社会』第7巻、東京大学出版会、1992年、327-361頁。

松田康博「米中接近と台湾 —— 情報統制と政治改革」増田弘編『ニクソン訪中と冷戦構造の変容』慶應義塾大学出版会、2006年、59-87頁。

毛里和子・毛里興三郎訳『ニクソン訪中機密会談録』名古屋大学出版会、2001年。

_____・増田弘監訳『周恩来・キッシンジャー機密会談録』岩波書店、2004年。

李鍾元「東アジアにおける冷戦と地域主義 アメリカの政策を中心に」鴨武彦編『講座・世紀間の世界政治 第3巻 アジアの国際秩序 —— 脱冷戦の影響』日本評論社、1993年、185-239頁。

若月秀和『「全方位外交」の時代 冷戦変容期の日本とアジア 1971～80年』日本経済評論社、2005年。

本稿は平成十七年、十八年度科学研究費補助金の成果である。

[追記] 本稿脱稿後の2006年8月31日に、以下が出版された。*Foreign Relations of the United States, 1969-1976: China, 1969-1972, XVII* (Washington DC: Government Printing Office, 2006).

**Recent Research Findings on Nixon/ Kissinger Foreign Policy:
Interpretations on Rapprochement
with China and Triangular Diplomacy**

<Summary>

Ryo Sahashi

This paper reveals the recent research findings on the Nixon/Kissinger foreign policy, on which many scholars kept their interests but found difficulty in researching due to the limitation on archives available. Introducing recent diplomatic-historical articles, the author discusses the research findings on rapprochement with China and triangular diplomacy along with four pillars of argument. (This paper does not trace the negotiation process, argue on Chinese decision-making for rapprochement, or sketch post-Nixon-visit negotiations.)

First of all, the argument that triangular diplomacy benefits the U.S. in its bilateral negotiation with the Soviet and peace negotiation on Indochina is analyzed. To be sure, the Nixon administration believed the effect of triangular diplomacy vis-à-vis the Soviet and China, but there is no strong evidence to support the expected effect of triangular diplomacy on these negotiations. The effect of other conditions, such as the concept of “decent intervals” and the possible cease of air strikes, should be considered to evaluate that effect.

Secondly, this paper examines the Kissinger’s claim that throughout the negotiations with Beijing the Taiwan question had been rarely discussed and the U.S. did not change its stance. The declassified minutes of negotiations apparently shows that “Taiwan” was crucial for their negotiations, while we could see various interpretations on the question of “compromise” in Shanghai communiqué. On the one hand, some emphasizes the merits by this, inserting the phrase such as “diminishing the tension.” On the other hand, the U.S. agrees that she “does not challenge” one China and withdraws her forces in

Taiwan without Chinese promise on peaceful settlement on the Taiwan question. In addition, the minutes reveals that Nixon and Kissinger assured Chinese leaders of the U.S. opposition against Nationalist attacks on mainland, Taiwan independence, and the rise of Japanese militarism and intervention into Taiwan. They also privately stated the timetable for the withdrawal of the U.S. forces from Taiwan and the process of normalization. These statements are not on the communiqué. Nixon administration seems to consider that Taiwan problem could be used to bargain with China for getting advantage of triangular diplomacy, while Beijing did not change its stance on Taiwan.

The third pillar of argument is the statement that State Department was excluded from the rapprochement process because it lacks strategically thinking. The recent studies reveals that Bureau of East Asia had more pessimistic views on the possibility of the change of Chinese foreign policy than White House even after the Sino-Soviet border clashes in 1969. However, the other study also tells us that State Department had gradually changed their estimates and Nixon and Kissinger had approved their cautious stance for Warsaw Ambassadorial talks. It is rather difficult to assert that State Department had been excluded merely because of their cautiousness in China policy.

Finally, this thesis investigates the insistence that Nixon/Kissinger diplomacy decisively breaks with the ideological thinking which has dominated the Cold War administrations until then. In fact, Kissinger shared with the past administrations the concept of credibility as the principle of the strategy, persisted on getting leadership among western blocs, and kept intervening into the periphery. Some argues the failure of détente was due to the chaos after Watergate scandal and the rising power of Congress, but many also criticize the limitation of Nixon-Kissinger détente architecture, such as not sharing the objectives with the Soviet and China, respectively.

Other studies have been developed on the impacts of the U.S. rapprochement with China on Taiwan, Japan, and international politics, and on the collaboration between two capitals as “tacit allies”. One agenda yet to be investigated is on how the Nixon and Ford administration had prepared for

their normalization process with China after the Nixon visit. With such findings, we could get the answer to the question whether the U.S.-China normalization with the termination of the mutual defense treaty with Nationalist government in Carter era was “slide” from Nixon era or “jump” by then-National Security Advisor Zbigniew Brezinski.